

## 36 旧制高校理科(乙) および旧制医科 大学予科における語学教育、リベラ ルアーツと現在

柴田 幸雄

最近秦様が「旧制高校物語」という本を出された。私は昭和三年生まれで旧制中学校を昭和二十年四年生の時、五年生の人達と共に卒業、上級学校を受験した。空襲のもと旧制高校を受験し、混乱の中、結局和歌山県立医専へ入学した(大阪と高知高校はテストのやり直しがおこった)。和歌山県立医学専門学校へ入ったがすぐに終戦和歌山医専は医大に昇格、医専二年生終了後、新設医大予科(旧制)へ入学した。医大は旧制のまま、昭和二十七年三月卒業、インターン生となっている。当時旧制ではドイツ語が中心で、ラテン語やギリシア語も少しなかった。

戦後のスミ消しの事がよく言われるが、私達は逆で、

中学校四年(昭和二十年)の時、「キングスクラウンリーダー」は「神田ブリーダー」と変わり、英国の少年という所は、インド洋でのプリンスオブウェールズ、レパルス号撃沈の記事に変わってしまった。語学教育については大矢全節先生の本が有名である。「日佛混合の小皮膚科学、(岡嶋さんの日独の解剖の本にもお世話に成った)伊和新医薬辞典、蘭和医学辞典、(緒方先生の感想文がある)」私は昭和三十二年から三十五年まで米国ウィスコンシン大学へ行く機会があり、第二外国語教育を少しみる事が出来た。マリオ・ベイによる世界の言語やアメリカインディアンの言葉という本も見る機会を得たが大学のフランス語の授業を受け、(日本にも基礎数学用語用例辞典がある)又旅行者のための佛、伊、西語やこの州特有のノルウェー語の授業もあった。その際思ったのは第二外国語をならう時第一外国語で第二外国語をならうと、どちらも進歩すると思っただ次第である。昔は解剖の先生は、骨一本をもってこれ、ラテン語で黒板に書かれていた。生化学はすべての化学式をそらんじておられた。(カルテがドイツ語から英語に変わった時、困った思い

出がある。又「マドリッド」大学へ行った時、黒板にラテン語がならんでいたのを見た事がある。今の教育は「おぼえてはいけない」とよく言われるが、先ずおぼえる事はおぼえ、理解しなくてはならないと思う。鉄道唱歌や年号（私の時は神武紀元であるから今は六百六十年引かねば西暦にならない）数学の位取りなど、「兆京…分厘…」などもおぼえ、化学の数字も「モノ、ジ、トリ」とおぼえた。何も教育勅語にもどれとは言わないが、大<sup>コ</sup>学、小<sup>コ</sup>学論語<sup>コ</sup>孝<sup>コ</sup>経<sup>コ</sup>などのコトバが多く出ている。前に学術語についても発表した（ヘボンの和英語林（二八八六年）日葡辞書）さらに橋田邦彦先生の道元の全機についても考えてみた。最近（二〇〇三年十一月）の学術用語集、医学編でも末端肥大症は先端巨大症になっている。医療事務の人の検定試験で「フリガナ」をつける問題があるが、例えば腹腔は「フツクウ」「フククウ」「フツコウ」「フクコウ」何れが正しいか困ってしまう。生化学会ではドイツ語よみをカタカナで書くとなっていたが今は、混乱、シトクローム、ロイシン、などわからない。最近学生から聞いた事だがホタルの光は、歌っては

いけないという学校もあるとかさっぱりわからない。  
（文部省の「目で見る教育のあゆみ」は色々と書かれている）  
この間長門谷先生からいただいた「皮膚科の病名由来」アラカルトがあり面白くよませてもらっている。特に医学用語で、「アドレナリン」（ラテン語由来）と「エピネリン」（ギリシャ語由来）があるし、副甲状腺と上皮小体もある。（昔の本、例えば竹内潔の物理学、亀高德平の無機化学、六高（岡山）の山岡望先生の化学などは今でも役に立つ様に思う）今後日本の医学教育もどうなるのか温故知新をすすめていかねばならないと思う。

（愛知医科大学）